

第二六回野尻湖クリルタイ

北 川 誠 一

広く北アジア、中央アジアを対象とする研究者の集会で
ある野尻湖クリルタイは、第二六回が一九八九年七月二〇
日から、二三日までの四日間開催された。会場は野尻湖ホ
テル、参加者は以下の三〇人であった。

池内功(四国学院大)、池上三良(札幌大)、石橋崇雄(国
士館大)、板橋義三(九大)、梅村坦(立正大)、岡田英弘(東
京外大AA研)、長田夏樹(神田外大)、小谷仲男(富山大)、
加藤和秀(東海大)、川瀬豊子(樟蔭女子短大)、川又正智
(国士館大)、菅野裕臣(東京外大)、菊池俊彦(北大)、北

川誠一(弘前大)、北村高(龍大)、百済康義(龍大)、久保
智之(九大)、後藤明(東大東文研)、佐藤道郎(岩手大)、
朝克(東京外大、中国社会科学院)、橋本勝(大阪外大)、
林俊雄(オリエント博物館)、樋口康一(愛媛大)、胡進杉
(故宮博物院)、藤井麻湖(大阪外大)、細谷良夫(東北学
院大)、堀川徹(京都外大)、宮脇淳子(東京外大AA研)、
森川哲雄(九大)、劉家駒(故宮博物院)。

池内は一昨年从去年にかけ、内蒙古大学蒙古史研究所
に留学。各地で元代の石刻史料を見る。雲南ではフビライ
の大理征服記念碑、また山西省では元代の建物、壁画を見、
石家荘では漢人世侯史天沢の子孫に会う。族譜は文革中焼
捨てられた。石刻史料の保存は非常に悪い。科学研究費で
文献情報の整理を行い、現地に提供する計画である。

池上は、ソウルのInternational Workshopに出席。ラド
ロフが収集した満州語口語資料が、Ivanovskayaの文例集
にあるが、ここからキルギスの叙事詩のテキストと日本語
訳を発表。継続中のウイグル民族文化調査は『生活語彙』
を出版。今秋刊行予定の三省堂『世界言語学大事典』(中)
にツングース語を執筆したが、そこでは同語の分類を試み
る。なお、シボ族の表記は中国語音によっているので、日
本語としてはシベを定着させたい。

石橋は、『御製清文鑑』中の行政改革関連部、『清文備考』

所収『戸部成語』の残部に手をつけている。八月より遼寧・吉林調査。

板橋は今春、九大に赴任。日本語・韓国語と他のアルタイ諸語の形態論を比較する。昨年は目的格助詞について、CAJに発表。古代日本語の格助詞「い」と韓国語との比較、格助詞「より」・「ゆり」の比較、アルタイ語未来形の「う」・「り」と韓国語との比較等を手掛けている。

梅村は山田信夫のウイグル文献原稿整理に参加、単に整理するだけでなく、今日的な学問水準を保つ方針。『中央アジア文献目録』の校正を行う。東洋文庫ではインディアナ大学の中央アジア史研究所と資料交換を行うことを考慮中。文庫は満州語マイクロ、刊本を提供、研究所は印、英、ソ連所蔵のベルシャ語チャガタイ語写本マイクロフィルムを提供。個人的には、日仏コロク(中央アジア史文献資料)、中近東文化センター(パクスタリカ)、東洋文庫(クチャ、クムトラ千仏堂の現状)発表。八月訪中。

岡田は昨九一二月、ハイシツヒ設立のボン中央アジア言語文化研究所に滞在。その間、ドイツ・オリエント学会(ケルン大学)、中央アジア重点東洋学特別研究領域最終討論会に出席。また東ベルリン古代史・考古学中央研究所を訪問、トルファン文書、森鷗外記念館を見る。今年は第三二回ジャックに出席、"Dayan Khan in the Biography of

Altan Khan"を読む。帰路ロンドンに立ち寄り、チャルズ・ボーデンを訪問、またケンブリッジで講演。八月二七日から開催される国際チベット学会では、一五七八年のアルタン・ハーンとグライ・ラマ三世会見の経緯について報告する。

長田は、一九八五年神戸市立外国語大学を退職、八七年から現職。連作「胡漢複合文化論」の第四論文を著す(一九八五年)。「漢代中亜の遊牧部族雑験」は、天馬に関する(Ⅱ)を一九八六年に発表、(Ⅲ)はこの夏執筆の予定。日韓共通祖語構築を目指す。記紀に見える朝鮮史書の影響を論ずる。風土記の朝鮮語起源地名には、百濟語と新羅語の二系統あることを、村を意味する「スキ」、「ツキ」によって説明。契丹大字、契丹小字の研究にとりかかっている。

小谷はラーニガット発掘調査の報告を(『ガンダーラ仏教遺跡の総合調査概報一九八六』、京都大学、一九八八年)出す。これは小谷にとってもクシャン朝遺跡発掘一〇年の記念碑となる。この一〇月は再びパキスタンで発掘。昨年は、恩師水野精一の足跡を辿って、中国に仏教遺跡を尋ね、炳靈寺、麦積山等を見る。炳靈寺はダムに水がなく、船が使えなかったため、ロバで山越えをした。

加藤は山田論集に追悼文。先年ここで発表のキーシュにつき、キーシュとチムールには個人的関係があったことを

主張。中近東文化センターでは、各宗教、宗派に超越するものとしてチングス・ハーンがあつたことを述べる。学内研究会でシール派の宗教劇ターズビーイェについて述べる。同朋舎の東洋史教科書シリーズに中央アジア史を執筆。

川瀬は、大阪外大非常勤から樟蔭女子短大に異動。イランに滞在して、見聞記を発表。昨年渡米、シカゴ大、メトロポリタン博物館を訪問、近年トルコ政府から返還要求のあるリディア・コレクションを見る。今年は、フランスでエラム研究の現状を見、当地のエラム研究者達とも面談。オランダでアカイメネス・ワークショップに参加。

川又は、一昨年古代イラク研究所から教養部に異動。研究所はアッカドの遺跡調査を目指すことになるが、先年の調査では、ナジャフのアリーの遺跡に住み、初期イスラム時代のキリスト教徒の遺跡を発掘。近隣のシール派住民が自由に酒類の販売をしていることに驚く。個人の研究は初期農耕、彩文土器、小麦栽培を関連づけ、地中海農耕と中国文明の関連を展望。都下町田市の旧家にインド・マカダ国から移住したという伝承をもつものがあることを紹介。

菅野はソウルのアルタイ学会に出席「ソロン語の音素体系について」発表。招待された理由は、韓国の若手アルタイ学者を多数韓国語教師として招いたためか。第三回世界

韓国語学会に出席、日、米、加、仏、ポーランドに於ける韓国語教育の現状が論じられた。北米では二世に対する母国語教育の域を出ない。外国語としての普及は日本が一番。第四回中国域外漢籍国際学術会議に出席（ホノルル大）、日本側窓口は九大町田、福岡大笠、早大福井の各氏。昨年一〇月「コスモス朝和辞典」を出版したが、これは名詞の加算、不加算の別、各動詞がとりうるアスペクトを示した画期的なものであると説明。

菊池は、靺鞨同仁文化について中ソの調査にもとずいた論文を発表、また靺鞨と流鬼について発表、一〇一三世紀東北アジアの情勢、およびカムチャゲールとアイヌの交流について論じる。加藤晋平氏の日ソ共同考古学調査は、アルタイ地方の旧石器、北海道の旧石器、アムール下流の新石器遺跡を調査、次回は日本で行われなくてはならない。北川はモンゴル帝国支配時代のロレスタン史を研究中。

下北半島佐井村の船乗り佐之助の息子アンドレイ・ターリノフが一八世紀に作成した露日レキシコンを翻訳する。

北村は、龍谷大学所蔵宋版仏典を研究。中国の刊本は校訂が行われていない上に、中国の寺院では明版の奥付けが取れたような物を全て宋版としている事例を紹介。

久保は昨年森川と新疆を一カ月旅行。シボ語の音韻体系の調査。漢語化が進行し、町に出た若者は既に話すことは

できなくなっている。ウルムチでは毎朝現地時間の九時にシボ語放送があるが、発音が中国語化しているのみならず、声調までつけられている。満文三国志をパソコン入力。

百濟は七年ぶりの出席。一九八六年には東ベルリンに七か月、ギーセンに五か月滞在して、ルコック将来トルファン文献の漢文、ソグド文、ウイグル文テキスト研究、特に漢文仏典断片の同定作業を進める。ソグド語『犯罪軽重經』は、大藏經所収のものよりは、日本伝来の異本とよく一致している。これらは既に出版、或は目下執筆中である。今年は開学三五〇年にあたるので、西域関係国際シンポジウム開催予定で、同時に大谷探検隊展覧会も開催する。

胡は政治大学出身で西蔵が専門、宮中檔案の整理を手掛け、『秦權関于西蔵事務的選輯』を出版した。

後藤は科学研究費重点領域「イスラムの都市性」に関して昨年アメリカ調査及び、北米中東学会（ヒバリーヒルズ、一部会、参加者千人）に出席、後藤持論の「自由都市イスラーム」の自由を「生きるのも死ぬのも勝手である」と言う意味で説明、それがイスラーム社会その物の性格である」と主張。なお、昨年度本報告の表現は上記のように訂正、また計画の趣旨も「イスラムを基軸にして社会科学全体を考へ直す」と訂正。数年来、岩波書店の講座世界歴史に代わる新しいシリーズ企画に参加、「歴史と自然」に執筆。

彙 報 北川

佐藤はドイツの百科事典に「性の転換」について執筆し印欧語族のモチーフがチベット、モンゴルに波及したことをのべた。非仏教系のアーユル・ヴェーダ医学のチベット流入を研究、盛岡で研究会主催、成田の学会に出席。

朝克はフルネームが Dulat Oor Cog（杜拉尔・敖斯尔・朝克）内蒙古自治区ハランバイル盟ハイラル市に近いエウエンキ自治旗出身。両親は同民族の有力者、ソ連留学経験者の祖父は文革で殺される。漢族地区南屯の小学校に入る。ダフル語が第一言語で、エウエンキ語、モンゴル語、漢語も学習。現職民族研究所主任研究員、来年まで在日。

橋本は昨年八月末、呼和浩特開催の内蒙古師範大学「蒙古秘史」国際学術討論会出席、「トゥルン」と「テリウン」を読む。この学会では三部会で六〇本の発表があった。ソ連、チェコ・スロヴァキア、ブルガリア、カナダからも参加者。専門の関係では、『内蒙古大学学報』に「蒙古秘史のテムギユについて」発表、『実用中等モンゴル語』三二三頁を編む。モンゴル語の活用、日韓両語比較についても発表。樋口は、日本言語学会リレー講演で「中央アジアの言語分布」を担当、同じ趣旨で、大学の公開講演を行う。「言語文化接触に関する研究」は「西田龍雄還暦記念論集」で発表。法華経モンゴル訳の研究に着手する予定。

藤井は卒論で、「モンゴルの伝統的婚姻儀礼」を調べる。

第七十一巻 一九三

伝統的なものは内蒙古の田舎に残り、外蒙古では封建的遺風として退けられる。しかし、そのような物には近世に由来するものもある。今はオイラト語の叙事詩を読む。

林は昨年六月ローラン予備調査隊員として、ウルムチ、トルファンを訪問。ウルムチでは匈奴・スキタイ様式青銅製鏡を発見（ヘーデン全集月報に書く）、突厥石人の裏が鹿石になっているものに注目。昨年八月―十一月は、シリアで発掘、イタリアに寄って帰国。スキタイ、シルクロード関係の翻訳多数発表。オリエント博物館では、「アミューレット展」、次いで「吉野ケ里展」を開催、なお江上波夫館長は、八月外モンゴルへ、チンギス・ハーンの墓捜しに出発、確かな情報があるとのこと。

細谷は昨年より遼寧・吉林調査の本調査を始める。今年は八月一〇日出発予定。広島大学浦コレクシヨンの満文資料調査、貴重な史料でありながら岡田、神田、松村各氏が利用しただけの「旧満州档」を天命―一年勅書を中心に研究中。私学財団の研究費を得て、荅岐、対馬、長崎の調査旅行を実施した。

堀川は昨年はオリエント学会（京都外国語大学）に忙殺された。一昨年夏、シリア、トルコの調査を行ったが、報告書は間もなく出版される。学内の地中海文化研究会では、「Mare Nostrum」を発刊。中近東文化センターで報告、京

都日土協会で講演。七月二七日から九月二〇日までトルコ調査。最近ではガストアルバイター問題に興味を持つ。京都外大の「イスラム文化研究センター」（堀川がセンター長）では、所蔵資料を用いたイスラム写本研究会を企画、所蔵アラビア語写本カタログも作成中である。

宮脇は、昨年は岡田に同行してヨーロッパに旅行。今年はピアックに出席して、『蒙古王侯表伝』は満州語資料によっており、蒙古語訳はあとから成されたことを発表。この後ケンブリッジで講演、自らの研究歴をあかして、日本のモンゴル研究の状況を開陳する。ラムステッドがロシアのアストラハン近郊チェレブレンナヤで筆写したトルグートの承図コピーを入手。チベット文「ザヤパンディツタ伝」の研究は進行中。

森川は山田信夫関係事業に終始、残されたウイグル文献研究の整理は森安、小田、梅村が中心となる。九大と姉妹校提携を行った新疆師範大学の縁で実地調査。一九八七年には予備調査、昨年は本調査として、ウルムチ、カシュガル、ホータン、イリ、サイラム、アルタイをまわる。カザフ人、ウイグル人から聞き取り。羽田記念館で「新疆の牧畜」として発表。また、第五回国際モンゴル学会に出席、フフホトを経由して帰国。一昨年は、科学研究費を得て「アルタン・ハン伝」テキストと翻訳を出版。山川出版社の新

企画拡大版モンゴル史の明・清時代を担当。

劉は故宮博物院研究員、輔仁大教授。満州語が専門で檔案類の整理を行う。入関前史に興味をもっていたが、最近ではアヘン戦争時の英中関係史も手掛ける。岡田とは一九六三年以来の知人である。

研究発表A、朝克「モンゴル語とエウエンキ語共通語彙の母音の關係について」は表題のとおり、比較言語学の立場から、借用語を除いたモンゴル語とエウエンキ語の共通語彙の母音対応規則についてまとめ、その変化と本来の母音体系を明らかにしようとするものである。例をあげると、モンゴル語 a にエウエンキ語 a が対応する例は、 daga (付き従う) と a:di (タ)、モンゴル語 a にエウエンキ語 u が対応する例は、 təv (切れ) u u (タ) などである。モンゴル語の七、エウエンキ語の一四母音の間の対応を求めたが両語の關係はそれ程簡単ではないという結論が導かれた。種々の意見がよせられた。

研究発表Bは百濟「ヘルシンキ大学ならびにイスタンブル大学に所蔵の中央アジア出土仏教文献紹介」。ヘルシンキ大学には切手大の断片を含めて約二、〇〇〇点の漢文文書断片が蔵されている。後に大統領の地位についたマンネルハイムの収集品であることから、トルファン出土品である

ことは確実である。彼はフィノ・ウゴル協会およびヘルシンキ博物館の依頼を受けて一九〇六―八年中央アジア探検を行った。旅行記からは明かではないが、軍事的に興味のある情報はロシア陸軍参謀本部に渡っていたと思われる。

この収集品は一九七一年、協会からヘルシンキ大学に研究委託に供された。百濟は一九八一年に予備調査を行い、一九八二年には写真撮影を完成した。内容は道教經典が一点、社会経済文書が三、四点あるほかは全て仏典写本である。大乘仏典が殆ど、中原には伝わらなかったものも数点ある。年代は最古のものは四五〇年と確認できるが、七―九世紀のものが大部分である。さて、イスタンブル大学所蔵中央アジア出土文献の内、ウイグル語文献については、古くはアラトの紹介があるが百濟は未研究の漢文文献について、一九八七年に仏典同定作業を行いオスマン・セルトカヤと共に著の形でカタログを作成した。この仏典の中には穴空きが多いが、その欠落部分が、ベルリンに残されていることを発見した。表側の部分のみの一致だけでなく、紙背に記された文書も同一のものであった。イスタンブルのものがベルリンからもたらされたことは、明かであるが、その事情は、アラトは二〇年代から三〇年代にかけてベルリンで世俗文書の研究を行っていたが、一九三三年に留学した出口常順がアラトからコレクションの一部の購入を勧められ

ている。察するに、当時研究資金に窮していたルコックは収集品の一部を売却したのであろう。

海外事情報告Aは、池上、菅野が韓国アルタイ学会(The Altaic Society of Korea)主催のInternational Workshopについて報告。同学会は今年五月二三日から二六日まで、ソウルで“Altaic Comparative Studies-Present State and Problems”のテーマで開催された。日本からの参加者は池上、菅野の他に小沢重男が招待された。金芳漢教授が主催者として参加者の選定から始めて全体に采配をふるった。資金的には現代グループ鄭財閥の援助によるところが大きく、会場も同財閥の施設であった。最終日は金教授が“Remarks and the Genealogical Study of Korea”を読む。

海外事情報告B、劉家駒、胡進杉が「中華民国台湾地区阿爾泰學研究概況(一九八七—一九八九)」として中華民国蒙藏學術會議、中國邊境研究理論檢討會について紹介。中文の小冊子(三四頁)が用意された。

海外事情報告Cは、岡田英弘、宮脇淳子が「第三二回國際アルタイ学会(PACノルウェー・オスロ大学、一九八八年六月二—六日)報告」を行った。参加者は一九か国(在住国)から九二名、ソ連が一七名の大人数を派遣した。トルコも一一名の派遣団を送り、トルコ大使が二三日参加者全員を夕食に招待する熱の入れ方であった。日本からは

岡田、宮脇の二名のみ。宿舍は大学キャンパスに隣接する学生寮。朝食、昼食もこことする。地下にはバーもある。

開会式では開催委員長の大ウラル・アルタイ研究所ブレンデモン所長が挨拶。フェンスタッド副学長がノルウェーのアジア研究強化政策を強調。エクスカーシオンはフィヨルドの船遊び、冬季オリンピック会場であった。六一本のペーパーが読まれたのち、インディアナ大学アルタイ賞にヨハネス・ベンツィングが発表され、来年の開催をブダペストで行うことが報告された。天安門事件のあとで、参加者の対中関心は高く、鄧政權に対する評価は低かった。一方、ゴルバチョフの政策に対する評価は好く、東西間の学術交流に対する期待も高まっていた。

スライドは細谷が清朝初期史跡、小谷がガンダーラ仏教史跡発掘の状況、百済がトルファン文書の映写を行った。細谷は一九八六年に東北で清初の遺跡を歴訪、また一九八七年に文部省海外学術調査で調査を、一九八八年は科学研究費国際共同研究を行った。スライド「清朝勃興期の史跡——遼西走廊を中心に——」はその調査にかかっているもの。

研究情報案内としては、梅村が「日本における中央アジア関係研究文献目録」とその索引・正誤について「報告。先年ユネスコ東アジア文化研究センターから出版された上記目録、および索引・正誤編の成立の過程を説明。目録編

纂に関する技術的問題について言及するとともに、専任スタッフを得ることの必要性について強調。

なお来年の開催は例年の日曜日開催にもどし七月一七日から二〇日の予定となった。本稿は、梅村、北川のメモを文章にしたものである。